いのち結ぶ音楽の力

法然共生フォーラム in 広島

2011年の「法然上人800年大遠忌」を前に、記念事業「法然共生フォーラムｉｎ広島」（浄土宗、中国新聞社主催、京都新聞社後援）が、広島市中区の市青少年センターであった。「ともいき」はこの世だけでなく、過去と未来の「いのち」も見つめ、つながりを大切にする浄土宗の教えで、今回のフォーラムは音楽を通してそれを味わうのが狙い。第１部「いのちと語らう響」では、雅楽師の東儀秀樹さんが、講演に交え、笙や篳篥で、「越天楽幻想曲」などを演奏。神秘的な音色で聴衆を魅了した。第２部「ともいき音楽！」の談義でもフォーク歌手高石ともやさんと義太夫三味線の田中悠美子さんの弾き語り、浄土宗僧侶南忠信さんの笏を用いた「声明」が披露された。また、音楽の普遍性や「ともいき」の意味などについて語り合った。

音楽の魅力と「いのち」について話し合うフォーラムの出席者

第２部　談義と演奏「ともいき音楽！」

◇出席者
フォーク歌手　高石ともやさん
義太夫節、三味線　田中悠美子さん
浄土宗僧侶　南　忠信さん
◇コメンテーター
雅楽師　東儀　秀樹さん
◇コーディネーター
仏教大教授　高田　公理さん

高田　第１部は雅楽の魅力をお話ししていただいた。第２部はフォーク、義太夫節、声明に注目したい。高石さんは西国三十三所観音霊場で巡礼歌を奉納されたそうですね。

高石　４月に始めて11月７日に満願を達成した。各札所では境内や本堂でミニコンサートを開いた。僧侶の方は500年前、千年前の話を普通のことのように話される。過去から現在へつながる「いのち」を感じたからネ思議だ。

たかいし・ともや　ポプ・ディランに衝撃を受け、1966年デビュー。日本フォーク界の草分け。現在、巡礼歌を携えて『西国巡礼Ｋｕｎ－99－キロ』に取り組む。

たなか・ゆみこ　東京芸術大学在学中、義太夫三味線の音色に引かれた。1990年度芸術選奨文部大臣新人賞受賞。現代音楽や舞台芸術とのコラボレーションでも活躍する。

みなみ・ちゅうしん　浄土宗総本山知恩院法務部長。京都教区大光寺住職。声明、法要儀式を研究し、国内外で公演をしている僧侶グループ「七聲会」の代表を務める。

言霊が体に染み込む――東儀さん
人の心に響く普遍性――高田さん
仏教以前も聖典に節――南さん
一つの世界をつくる――高石さん
心開放する義太夫節――田中さん

音楽から余分なものをそぎ落としたのがフォークソングだと思っている。リズムやハーモニー、メロディーは不完全であっても、思いとエネルギー、信頼感で「私とあなた」をつなぐ一つの世界をつくりあげていく。

田中　私の場合は義太夫三味線の弾き語り。義太夫三味線は津軽三味線と同じ、太棹になっている。江戸時代、竹本義太夫が浄瑠璃を大成すると、義太夫節は浄瑠璃の代名詞になり、お座敷や寄席でも演奏されるようになった。義太夫節の真骨頂は、人々の苦しみを深く表現することにより、聴き手の共感、同調を誘い、心を開放することにある。登場人物を語り分け、場面に合った効果音を三味線で表現するのは本当に難しい。

高田　三味線と語りの迫力には心を揺さぶられた。現代人には、せりふが少し難解だが、仏教の声明も一般の人には分かりにくい節をつけて唱えるが、技巧を凝らさず、風が吹くように、あるいは波が打ち寄せるように声をそえ、淡々と唱えるのが特徴だ。

イギリスで声明の公演をしたとき、お布施を頂いた。封筒に書かれた英文を訳してみると、小林一茶の「花の陰あかの他人はなかりけり」という句だった。花見のときは見知らぬ同士でも親近感を覚える。言葉を介さなくても、現なる雰囲気を感じていただけたものと解釈している。

高石　外国で歌ったとき、「あなたは神様から現なる声をもらっている」と英語で言われた。飾らない素直な声には、言語の壁を越えて伝わる力があるのかもしれない。

私が法然上人を好きなのは、「南無阿弥陀仏」と声に出して唱えるよう言われたから。声に出すことで素直になり、来世の幸せだけでなく、現世も生き生きしたものになるのではないかと思う。

東儀　「南無阿弥陀仏」の「南無」は古代インドのサンスクリット語「ナモ」を漢字に写したものだといわれている。私たちに意味が分からないのは当然ともいえる。

日本では古くから、言葉には霊力が宿ると信じられてきた。繰り返し口にすることで音が体に染み込み、頭で理解するよりも深く細胞レベルで感じられるようになるのではないか。声明を聞くと身も心も浄化されたような気持ちになるのは、そのためではと、思う。

南　ありがたいご意見をいただき、心を強くいたしました。

高田　言語は人の細かい意思疎通に欠かせないが、それが通じる人と、通じない人を区別する壁になることもある。そのようなときも、人の心に直接響く音楽は、「ともいき」を可能にしてきたのだろう。音楽の普遍性の力をあらためて認識することができた。

とうぎ・ひでき　東儀家は奈良時代から続く楽家。宮内庁楽部では篳篥を主に琵琶、鼓類などを担当。雅楽にシンセサイザーなどを交えた創作も意欲的で、注目されている。

第１部　講演と演奏「いのちと語らう響」

雅楽師　東儀秀樹さん

「越天楽幻想曲」は私のオリジナル曲。雅楽で最もが強いかもしれないが、有名な「越天楽」の旋律を生かして編曲した。「越天楽」は平安時代にはすでに演奏されていたことが分かっており、自然や宇宙、人との調和が重んじられていた時代の音楽だからこそ、千年を経ても変わらぬ気高さ、優雅さで、心に響くものがある。

雅楽は一般に神事のとき演奏される音楽という印象が強いかもしれないが、元来は仏教音楽として伝わった。雅楽で用いられる笙、篳篥、龍笛はシルクロードを経て約1400年前に日本に伝わって来たが、当時の姿のまま生き続けているのは日本だけ。笙は天から光が降る音、篳篥は地上の音、人間の声、龍笛は天と地を行き交う龍の声を表すといわれる。当時は、三つの楽器を合奏することで、天・空・地を合わせ、宇宙空間を形成するという発想があったからだ。

僕が雅楽を始めたのは19歳のとき。その前はロックのギタリストになろうと思っていた。せっかく東儀家に生まれたのだから雅楽にも触れてみようと思ったのと、日本の伝統芸能を守る者としての誇りや責任を感じるようになった。

自然や宇宙表現
演奏で時空超えた旅

雅楽には音楽だけでなく、昔の人の生活感や宇宙観が潜んでいる。たとえば「源氏物語」で光源氏が舞う「青海波」。宮内庁楽部で舞を学び、装束や振り付けを、きぬ擦れの音まで知っている私には、当時の空気さえイメージできる。現代を生きていても、雅楽を演奏することで、時空を超えた旅ができるのであり、ここの魅力は、あらゆる音楽に共通するものかもしれない。

私は今までに、がんと交通事故で死にかけたことがある。ところが不思議と、もうだめだとか、死ぬのが怖いとかは思わなかった。がんだと知ったときは、死ぬ瞬間まで一瞬、一瞬を一生懸命に生きようと考え、病室で作曲をしたり、お見舞いでもらった花をスケッチしたりした。

事故に遭ったときは指先が動くことに感謝し、救急隊が来たときも、テレビを見るようで、何かわくわくしていた。私が生きていられるのは、そんな「わくわく細胞」のおかげかもしれない。多くの人たちと「ともいき」しながら、わくわくできるところに自分の心を運んでみようということでしょうね。

たかだ・まさとし　京都大理学部卒。武蔵川女子大教授などを経て2008年から現職。専門は社会学、文明学、観光学。著書に「にっぽんの知恵」「酒場の社会学」など。

＜メモ＞浄土宗の開祖、法然は1133年、岡山県久米郡で生まれ、13歳で比叡山に上がり学問を修めた。一心に「南無阿弥陀仏」を唱える「専修（せんじゅ）念仏」の教えを説き、人々の心をとらえたが、当時の旧仏教に非難され、四国に流罪になった。許されて帰京後、1212年に亡くなった。800年大遠忌フォーラムは、今年５月に京都で始まり、広島市は５回目。

浄土宗21世紀劈頭宣言

愚者の自覚を
家庭にみ仏の光を
社会に慈しみを
世界に共生を

平成23年に、宗祖法然上人の800年大遠忌を迎えます
法然上人の心とともに、新しい「共生文化」を創造しましょう

法然共生

宗祖法然上人800年大遠忌

総本山 知恩院（京　都）
大本山 増上寺（東　京）
大本山 金戒光明寺（京　都）
大本山 知恩寺（京　都）
大本山 清浄華院（京　都）
大本山 善導寺（久留米）
大本山 光明寺（鎌　倉）
大本山 善光寺大本願（長　野）

浄土宗 Jodo Shu
Buddhist Denomination
http://www.jodo.or.jp

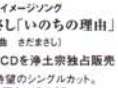
大遠忌記念事業トピックス

絵本『コール マイネーム 大丈夫、そばにいるよ』が、刊行されました。

絵本作家・葉祥明さんが紡ぎ出した『阿弥陀経』のメッセージ

無限のいのちを説く『阿弥陀経』の世界。悲しみの淵から抜け出せないとき生きる意味を考えているときこの本を手にとって開いてください。

絵と詩：葉祥明／発行：浄土宗
編集協力：角川学芸出版



法然共生イメージソング
さだまさし「いのちの理由」
（作詩・作曲　さだまさし）
シングルCDを浄土宗独占販売
アルバム「美しい朝」から待望のシングルカット。
「法然上人のこころ」と「大切なのいち」を、
多くの皆様に感じていただければ幸いです。

※「コール マイネーム」「いのちの理由」は下記浄土宗出版で販売中。
なお「コール マイネーム」は全国の書店でもお買い求めいただけます
（帯のデザインが若干異なります）。

浄土宗出版　東京都港区芝公園4－7－4
TEL：03-3436-3700　FAX：03-3436-3356
浄土宗出版HP：http://press.jodo.or.jp/